

## コラム

## 30人規模学級編制

長野県では、全国に先駆けて小・中学校の全学年で30人規模学級を推進し、児童生徒一人ひとりに応じた、きめ細かな指導を行い、学習習慣の確立と基礎学力の定着を図ります。

### ■ 全国に先駆け、小・中学校の全学年で30人規模学級を実現



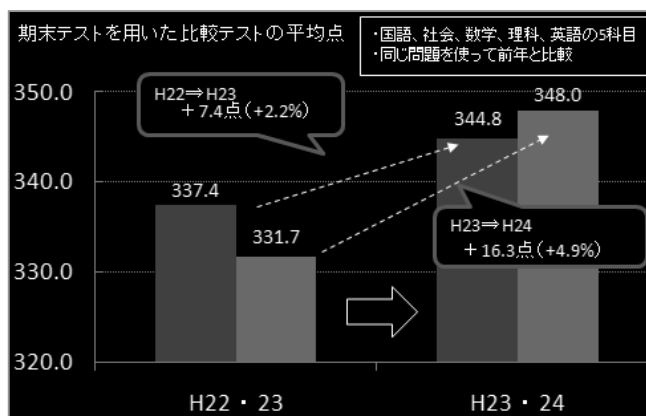
長野県では、平成14年度から「信州こまやか教育プラン」を推進し、小学校1学年から順次30人規模学級を進め、平成21年度には、県内すべての小学校の全学年で実施しました。

平成23年度には、中学校における学力の低下や不登校、発達障害など特別な支援を必要とする生徒の増加など様々な教育課題の解決を図るため、30人規模学級を中学校1学年に導入し、平成25年度には県内すべての中学校の全学年で実施することが可能となりました。

### ■ 教科指導、生徒指導の両面で効果

30人規模学級の導入により、教師が一人ひとりの子どもにかかわる時間が増えたことを活かし、個に応じたきめ細かな指導が実現できることになりました。また、教室のスペースに余裕が生まれることで、グループ学習など子どもたちの学び合いや話し合いによる学習がしやすくなり、子どもたちの発言や発表の機会が増えています。

その結果、比較テストの平均点が上昇したり、一人当たりの平均欠席日数が減少するなど、教科指導や生徒指導の両面で効果が上がってきています。



### ■ 保護者や地域の皆さんからの圧倒的な支持

30人規模学級が小・中学校のすべての学年に導入されますが、中学校の導入に当たり授業を参観した保護者からは、「学習環境がよくなった」「30人規模学級を、今後とも是非継続してほしい」との好意的な声をいただいています。

### ■ 成果の検証と指導方法の工夫改善

単に1クラスの子どもの数を少なくするだけでなく、学習内容に応じて工夫を凝らした授業づくりを行うことにより、子どもたち一人ひとりにきめ細かな指導ができるようになり、子どもたちの学習意欲が向上するといった効果が期待されます。

今後とも30人規模学級の成果の検証をしながら、より効果的な指導方法の工夫改善に努めます。

## コラム 体験学習（中学校集団登山）

長野県では、学校行事として、子どもたちの記憶に残る長野県ならではの体験学習が活発に行われています。中学校集団登山もその一つで、多くの子どもたちが学校登山を経験しています。

### ■ 中学校集団登山の実施状況

日本アルプスをはじめとする3,000m級の山々に囲まれている長野県では、明治時代から学校登山が始められ、「平成24年度学校経営概要のまとめ一小・中学校編（教学指導課）」によると、公立中学校の85.6%で学校登山を実施しています。小学校でも21.7%の学校が実施しており、子どもたちが美しく厳しい自然の中で多くのことを学び、普段経験できない貴重な経験をしています。

### ■ 学校登山のはじまり

長野県での学校登山のはじまりは、教員養成のための学校として生まれた長野県尋常師範学校で1889（明治22）年に実施された白根山と浅間山への登山とされています。師範学校で学んだ青年たちが県内各地に教師として赴任し、師範学校での登山体験を生かして、県内各地の小学校に学校登山が次第に広がっていきました。

また、明治末から大正にかけて、中等教育（旧制中学校）の教員を中心に博物学（現在の高等学校での生物と地学をまとめた教科）の研究が盛んに行われ、学校登山は高山に分布する動植物や鉱物を直接観察できる格好の研究、学習の場として活用されました。



### ■ 忘れてはならない教訓“聖職の碑（いしぶみ）”

長野県での学校登山を語る上で忘れてはならない教訓が、1913（大正2）年に起きた中箕輪尋常高等小学校の駒ヶ岳遭難事故です。新田次郎の小説「聖職の碑」の題材となった遭難事故で、11名の犠牲者が出ました。遭難した子どもたちを救うために、命をなげうって最後の瞬間まで死力をつくした赤羽校長をはじめとした教師たちの姿が小説の題材となったのです。このような事故が起き、一時は衰退しそうになった学校登山でしたが、事故から学び安全な登山を実現しようとする人々の努力によって、多くの学校で今日まで続けられています。



### ■ 長野県山岳総合センターでの集団登山関係者対象講座

山岳環境が豊かな長野県では、全国でも珍しい県立の山岳総合センターを設置し、遭難事故の防止と健全な登山活動の進展を図っています。センターでは、学校登山などの集団登山引率者研修会の実施や集団登山の教本、具体的な学校登山の注意事例等を提示し、より安全で楽しい登山の普及を図っています。

長野県の伝統である子どもたちの体験学習を維持・充実していくことは、時代の流れから様々な困難を伴う部分もありますが、過去に学ぶとともに新しい時代への対応も図りながら、子どもたちが信州に根ざし世界に通じる能力を持てるよう維持・充実していきたいものです。

## コラム

## 就業体験活動

長野県では、高校生の「ずく出せ修行」就業体験や、「みらい塾」などの体験的な学習を通して、キャリア教育を推進しています。

## ■ 「ずく出せ修行」就業体験活動

## ねらい

平成 15 年から、高校生による企業や各種施設等における就業体験を「ずく出せ修行」就業体験活動として実施し、現在は、キャリア教育の一環に位置づけて推進しています。

この活動を通じて、高校生の勤労観・職業観を育み、将来的な展望を持ち目的意識を持って学習に取り組めることを目指しています。

## 実施状況等

体験内容のうち、多いものは、機器や食品の製造、看護体験などですが、最近では福祉やサービス、販売が増加しています。また、弁護士など高い専門性を必要とする職業に就いている人と行動を共にして、その職について学ぶ「ジョブ・シャドウイング」などがあります。就業体験活動を行った生徒は、これまで知らなかった仕事の内容や働くことの大変さを理解し、ほとんどの生徒が「自分の将来の仕事を考える機会になった」と感じています。

就業体験活動にすべての公立高校が取り組み、実施する生徒数が年々増加し、平成 24 年度は、7,200 名の実施となっています。教育委員会では、キャリア教育の一環として今後も就業体験活動を推進し、在学中に 1 回以上取り組めるようにしたいと考えています。



## ■ 「みらい塾」

## ねらい

キャリア教育支援の一環として、産学官が連携して高校生に参加体験型のプログラムを提供することで、勤労観・職業観の育成と課題発見・問題解決能力、コミュニケーション能力、プレゼンテーション能力などの伸長を図ることを目指しています。

## 実施状況等

「地域」「国際的視野」などのテーマに基づいて、企業・団体の代表者やそこで働く方の講演をお聴きし、内容について少人数のグループでディスカッションを行っています。

平成 24 年度には、高等教育コンソーシアム信州主催のピアメンター育成キャンプに参加した大学生との合同研修も実施しました。働くことや生き方などについて、比較的年齢の近い先輩と作業・討論をとおして考える機会となりました。また、ディスカッションの結果をグループでまとめ、発表する機会を設けることで、プレゼンテーション能力やコミュニケーション能力の訓練にもなっています。

「みらい塾」への参加をきっかけとして、ディスカッションやコミュニケーションの大切さを認識し、進路選択に活かしてもらいたいと思います。



コラム 県歌「信濃の国」

長野県では、多くの県民が学校で「信濃の国」や市町村の歌を習い、大人になっても愛着を持って歌っています。

■ 歌い継がれる県歌「信濃の国」

「信濃の国」はもともと信濃教育会が教材とすることを目的に長野師範学校の教諭に作成を依頼したもので、「地理歴史唱歌」6作品の中の一つでした。1899（明治32）年に長野県師範学校教諭の浅井洌（きよし）が作詞、翌1900（明治33）年に同校教諭の北村季晴（すえはる）が作曲しました。

1900（明治33）年10月に行われた師範学校の運動会で女子部生徒の遊戯（今でいえばダンス）に使われたのが、「信濃の国」が初めて披露された場であると言われています。

1966（昭和41）年に県章やシンボルを決定した際、「信濃の国」を県歌に制定しようという気運が盛り上がり、1968（昭和43）年5月20日に県歌として制定されました。



作詞者：浅井 洌  
（1849～1938）  
松本藩士の家に生まれる。1866（明治19）年に長野尋常師範学校（後に長野県師範学校と改称）教諭となって長野に移り、以降1926（大正15）年まで40年間同校に勤めた。  
（写真提供：公益社団法人信濃教育会）



作曲者：北村 季晴  
（1872～1931）  
東京生まれ。1899（明治32）年11月から1901（明治34）年2月まで長野県師範学校教諭として勤めた。その後、東京に戻り数々の曲を発表。児童歌劇の発展などにも尽くした。  
（写真提供：公益社団法人信濃教育会）

■ 県内の多くの学校で信濃の国や地域の歌

「信濃の国」は県内の小学校の音楽科や社会科の授業で取り上げられ、郡市ごとの合同音楽会等で歌われています。「平成24年度学校経営概要のまとめ—小・中学校編（教学指導課）」によると、93.9%の小学校、41.7%の中学校で「信濃の国」を歌う機会が設けられています。また、地域の歌（市町村の歌や郡の歌等）も、50.3%の小学校、35.8%の中学校が歌う機会を設けています。平成23年度からの学習指導要領では、「わが国や郷土の文化や伝統を受け止め、それを継承・発展させるための教育の充実」が主な改善事項の一つとされ、信濃の国などの郷土の歌を題材にしてふるさとを学ぶことが大切になっています。

■ 「信濃の国」が現代風に

現在の「信濃の国」は歌うだけでなく、ロック調にアレンジされダンスとして踊られています。他にもJ-POP風のCDが発売されたり、蓼科高等学校ジャズクラブによりアレンジされた演奏が行われるなど、時代に合わせて進化しています。また、各種スポーツの大会において長野県代表の応援歌として歌われることが多いほか、最近では長野県を拠点とするプロスポーツチームの応援の際にも使用されています。



■ 県庁で「信濃の国」が学べる？

県庁では、見学に来庁する小学生に対し「信濃の国」を使って長野県の地理、歴史、自然を学習できるミニ講座を開設しています。子どもたちに、県歌の歌詞に込められた内容を深く知ることで親しみを深めてもらい、この歌がこれからも歌い継がれていくようにと願って、クイズ形式で「県歌 信濃の国」の謎をとく「めざせ！信州豆博士」を行っています。

「信濃の国は ～ 十州に ～ ♪」と歌う十州の名前を皆さんは言えるでしょうか。

## コラム 長野県版運動プログラム

長野県では、子どもたちが楽しみながら運動に親しむ習慣を身に付け、体力や運動能力を向上させるために、幼児期から中学生期までの成長段階に応じたオリジナルの運動プログラムを作成し、普及しています。

### ■ 幼児期からの運動習慣を身に付ける

子どもたちを取り巻く環境は、大きく変化しています。生活が豊かで便利になり、外で遊ぶ時間や遊ぶ場所、遊ぶ仲間が減る等、体を動かす時間が減少しています。その結果、体力・運動能力に影響があると考えられます。体を動かして遊ぶ機会が減少することは、体力の低下だけでなく、その後の健康への影響やコミュニケーションをうまく構築できないなどの課題も指摘されています。

長野県の子どもたちの特徴としては、男子の体力は全国平均並みですが、女子の体力は全国と比べると低い傾向があり、運動する子どもとしない子どもの二極化傾向が顕著に見られる状況があります。このことは、幼児期からの運動習慣が身に付いていないことが一因ではないかと考えられています。

そこで、幼児期から運動習慣を身に付け、運動好きな子どもを育てるため、成長段階に応じたオリジナルの運動プログラムを作成し、県内の幼稚園、保育所、小学校、中学校への普及に取り組んでいます。



タンバリンジャンプ



りんごのぶら下がり



新聞紙ボールで  
「なげっこ、けりっこ」

### ■ 長野県版運動プログラム（DVD）の内容

#### 幼児・小学生低学年の運動遊び

幼児から小学校低学年向けの運動遊びで構成されています。内容は、片足くまさん、鬼遊び等の楽しい運動遊びを紹介しています。

#### 小学校中・高学年の体づくり運動

小学校中・高学年向けの体づくり運動で構成されています。内容は、多様な動きを作る運動、体力を高める運動等を紹介しています。

#### 全校運動に活用できる運動プログラム

小学校の全校運動や学級で活用できる運動で構成されています。内容は広い場所でもできる運動、狭い場所でもできる運動を紹介しています。

#### コアトレーニングが変える ウォーミングアッププログラム

中学校の保健体育授業のウォーミングアップの中で活用できる運動で構成されています。内容は、コアトレーニングを紹介しています。

コラム 子どもたちの地域行事への参加

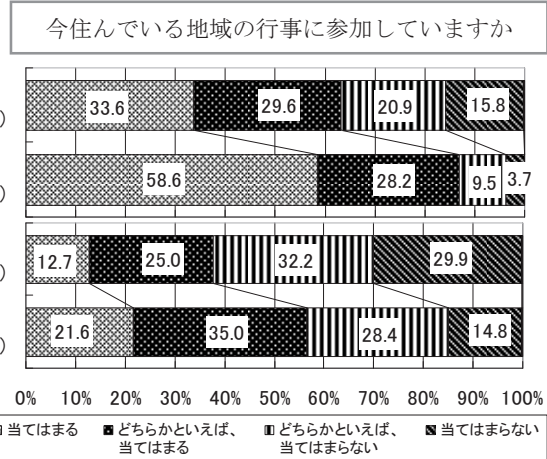
長野県では、各地で地域活動や行事が活発に行われ、参加している児童生徒の割合が全国トップクラスとなっています。

■ 長野県の子どもたちは地域行事に多く参加

長野県では、伝統を大切にする風土があり、地域で人と人が支えあう絆が強いと言われています。

文部科学省が行っている全国学力・学習状況調査の児童・生徒への質問紙調査において、「今住んでいる地域の行事に参加している」小学生は 86.8%、中学生は 56.6%という調査結果が出ています。この比率は全国平均よりも 20%程度高く、小学生・中学生ともに全国トップクラスの高さとなっています。

運動会やお祭などの地域行事のほか、地域の清掃活動、自然と親しむ活動、伝統文化を学ぶ活動、スポーツ活動などの様々な地域活動に子どもたちが参加しています。



■ 子どもたちによる地域活動

諏訪地域で7年に1度行われている全国的にも有名な諏訪大社の御柱祭ですが、大人にまじって多くの子どもたちも参加しています。地域によっては、練習を重ねた子ども木遣り隊が参加して祭りを盛り上げます。また、本祭とは別に各地域の神社での小宮祭などが行われ、より地域に密着したお祭りとして、子どもからお年寄りまで地域の人々がこぞって参加し、大いに盛り上がります。子ども御柱といわれる子どもが御柱を曳く地域もあります。



松川村では、安曇野ちひろ美術館と村立松川中学校が連携して夏休みにちひろの水彩技法を体験できるワークショップや企画展の作品紹介ツアー等を開催し、中学生のボランティアがワークショップのサポート、ツアーガイドなどを行っています。生徒たちは、当日のボランティアに参加するだけでなく、実技研修、接遇研修、事前リハーサルなど予め研修を重ねた上で貴重な経験に臨んでいます。

■ 長野県キャリア教育ガイドラインでも位置付け



長野県教育委員会が作成した長野県キャリア教育ガイドラインでは、「家庭・地域の教育力を生かし、地域社会全体で子どもを育てる。」を方針の第1に掲げ、「地域社会でさまざまな体験をし、多くの人と触れ合うことを通して、学ぶ目的や働く意味、生き方等について考えさせる。」ことを推進しています。

長野県の伝統である子どもたちの地域行事への参加は、地域ができる教育の代表的な方法であり、子どもたちが未来への生き方を学ぶ機会として充実していきたいものです。

コラム 信州ベーシック 長野県独自の教員研修資料

長野県では、子どもたちが授業でわかった喜びやできた喜びが味わえるように、小学校・中学校に「信州“Basic”～授業づくりのポイント～」、「信州“Basic”～ビジュアル版～」を配付して、教員の研修を活性化し、授業の質の向上を進めています。

■ 子どもの実態を基にした授業づくり

長野県の教員は、子どもの学習の実態をしっかりと把握した上で、授業構想を立て、学習中の子どもの意識を基にして授業を進めることを大事にしてきました。そのために、各学校では日々の授業をより良いものにしようと授業研究を行い、子どもの学習の姿や学習記録などから授業を振り返って研究会を行っています。県教育委員会でも「子どもと共に創る授業」をめざし、各校を支援しています。

■ 信州“Basic”～授業づくりのポイント～

平成 24 年度に各学校に配付した「信州“Basic”～授業づくりのポイント～」は、若手の教員向けに授業づくりの基本的なポイントを示したものです。あるべき教員の姿を示すことから始まり、教室環境づくりや教材研究の仕方、板書や発問の計画の立て方などについて、14 ページに渡って示しています。各学校ではこれを使って校内研修を行うとともに、総合教育センターで研修を受講した教員がその具体的な事例等を基に研修を深め授業改善に役立てています。



■ 信州“Basic”～ビジュアル版～

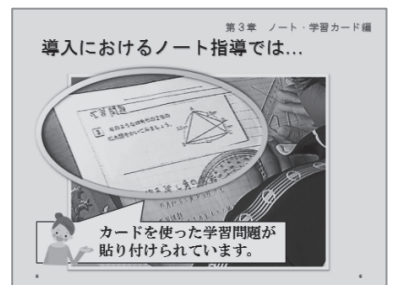


「信州“Basic”～授業づくりのポイント～」の理論を基に、各小・中学校で実践されている様子の写真等を使ってDVDにしたものが、「信州“Basic”～ビジュアル版～」です。実際の教室環境の写真や板書の写真、ノートや学習カード、教具などの写真に解説や問いかけを加えて、校内研修等で教員がその工夫を見て考えられるようにしています。いずれも基本的な内容

ですが、各校で工夫している取組を基に学び合えるようになっていきます。

■ 授業がもっとよくなる3観点

「信州“Basic”」の基になっているのが、「授業がもっとよくなる3観点」です。県教育委員会では「ねらいを明確にした授業をする」「授業の流れにめりほりをつける」「ねらいの達成を見とどける」という3つの点を意識しながら日々の授業を行うようにしようと呼びかけています。



## コラム 特別支援教育の地域化

長野県では、「ノーマライゼーションの理念に基づき、障害のある者もない者も地域で豊かに学べる教育環境づくり」の一環として、特別支援学校の小学部・中学部・高等部の分教室を地域の小学校・中学校・高等学校内に設置してきました。

### ■ これまでの分教室等の設置状況

- 小諸養護学校小学部ゆめゆりの丘分教室：佐久穂町立佐久西小学校：【平成 18 年度】
- 小諸養護学校中学部ゆめゆりの丘分教室：佐久穂町立佐久中学校：【平成 18 年度】
- 伊那養護学校小学部はなももの里分教室：駒ヶ根市立中沢小学校：【平成 20 年度】
- 伊那養護学校中学部はなももの里分教室：駒ヶ根市立東中学校：【平成 22 年度】
- 須坂市立須坂支援学校：須坂市立須坂小学校併設：【平成 23 年度】
- 稲荷山養護学校高等部更級分教室：長野県更科農業高等学校：【平成 17 年度】
- 安曇養護学校高等部あづみ野分教室：長野県南安曇農業高等学校：【平成 22 年度】
- 伊那養護学校高等部中の原分教室：長野県上伊那農業高等学校：【平成 24 年度】

### ■ 伊那養護学校小学部・中学部「はなももの里分教室」の様子から

この「はなももの里」の名称の意味には、春になると地域のあちこちで咲く「花桃」のように、この地域に根ざし、一人ひとりの色が「いきいき」と「とけ合いながら」過ごすことができるようにとの願いが込められています。

小学部・中学部分教室ともに、設置校との連携により日課を合わせる工夫をしながら、休み時間を活用した「ふれあいタイム」、縦割り清掃や児童会・生徒会活動への参加など、日常生活の中での自然なかかわりが期待できる活動の充実を目指しています。



また、それぞれの学年行事や学校行事等へも参加し、小学部分教室では、運動会の練習段階から一緒に学び、運動会当日も同じ学年の児童と一緒に学年種目に出場する姿が見られました。

中学部分教室では、体育や音楽を同学年の仲間と一緒に学んでみたいという願いから、東中クラスの授業に一部参加し、文化祭では、クラスの仲間の一人としてステージにあがり、合唱を発表する姿が見られました。

### ■ 障害のある子どもとない子ども、双方の日常的な相互理解の促進

日常的な交流及び共同学習を通して、毎日の「暮らし」の中でのかかわりが多く生まれてきています。その中で、相互の理解が少しずつ進み、互いに分かり合い感じ合う生活が積み重ねられることにより、分教室の子どもたちが、地域の中にいることが当たり前という意識が地域や学校全体を包み込んでいます。このことは、「共生社会の実現」に向けた大きな一歩になると考えています。



コラム

長野県の公民館

長野県の公民館は、設置数・利用者数とも全国1位で最も多く、地域の学習拠点として、その役割を果たしています。地域課題などをテーマにした多様な取組が県内各地で行われ、地域づくりの一翼を担っています。

■ 全国1位の設置数・利用者数

公民館は昭和21年7月文部次官通牒により日本特有の施設として産声をあげ、昭和24年社会教育法により法的に認知されました。

長野県では昭和21年10月、日本最初の公民館といわれる妻籠公民館が設置され、それ以降市町村合併や公民館の統合が進む中でも、1,236館（平成23年度社会教育調査）と全国1位の設置数・利用者数を誇り、社会教育の中核としてその役割を果たしてきています。

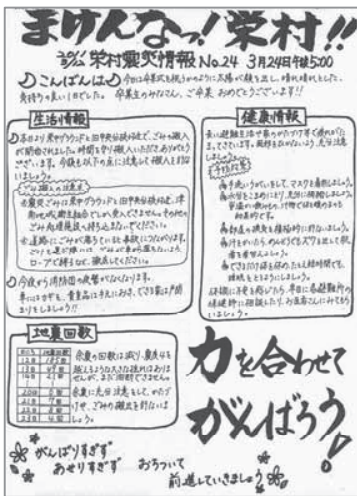
公民館数		
1位	長野県	1,236館
2位	山形県	524 "
3位	埼玉県	507 "
4位	山梨県	500 "
5位	愛媛県	440 "
(平成23年社会教育調査)		

■ 県内の実践例

飯田市では、公民館がつなぎ役になり地域の課題を高校生のフレッシュな発想や行動力で洗い出し、解決の方策を探る取組が進められています。

「バイパス道路の開通により人の動きが変わった商店街に人を呼び戻す取組」では、高校生が商店街の人の動きを調査、「子どもが来ない」という分析から、商店街で子どもが楽しめる企画を立案し、運営にも参加しました。

上田市では、地域づくりに直結した取組を見ることができます。里山の整備を公民館の学習テーマにして「里山講座」を開催、住民が自然環境や保全・整備について考える機会を設けたり、小学生を対象に里山で自然遊びを企画したりするなど、子どもから大人まで里山での学びと実践が進められています。



日頃の公民館活動が真価を発揮したものとして、栄村における長野県北部地震への対応があげられます。

平成23年3月12日未明に発生した震度6強の地震は、栄村に甚大な被害をもたらしました。避難所では情報が入らないことへの不安が高まります。そこで地域のことを一番よく知る公民館主事が執筆を担当し、翌朝には手書き新聞が発行され、「外出は禁止」「食事が用意されます」といった必要最小限の情報からはじまり、前向きになれる情報を次々に配信していきます。放送施設等が復旧する4月2日まで、全部で32号を発行しました。

公民館は、生活の中で生まれる地域課題を学習テーマにするなどして、住民が住み慣れた地域で安全・安心な暮らしができるように、地域に密着した社会教育施設として頑張っています。

## コラム 通学合宿（岡谷市の事例）

長野県内では、いくつかの市町村で通学合宿の取組が行われています。岡谷市では、子ども会育成連絡協議会と教育委員会が連携するとともに、地域の高校生が通学合宿を支えています。家庭を離れ、子どもたちが一緒に2泊3日の宿泊（生活）をしながら学校に通学し、異年齢集団の中で家庭や学校で普段体験できない活動等をみんなで決め、人間関係形成力を身に付け成長することを願い実施されています。

### ■ 通学合宿のはじまりとねらい

岡谷市子ども会育成連絡協議会は、子どもたちの年齢や地域を越えた繋がりが希薄となっていると言われる中、子どもの成長過程に大変重要であるとの認識により、市教育委員会と協働で平成14年から通学合宿に取り組んでいます。学校や年齢の異なる小学校4年生から中学生までの児童生徒と一緒に生活しコミュニケーションを図ることで、協調性や規範性、また積極性を育むことを目的としています。

この通学合宿の参加者は事前に2回の打合せを行い、初めて顔を合わせる子どもたちが班毎に分かれ、係や班の目標を話し合っ決めて、本番前から個々の成長を促しています。また、平成23年度からはより多くの子どもに体験の機会を与えたいとの思いで、年2回実施し、平成24年度は延べ95名の小中学生と26名の高校生が参加しています。



宿泊施設へ帰宅

### ■ ボランティア・地域との繋がり

事業はこれまで様々なボランティア団体、地域の皆さんの協力を得て実施してきました。特に食事の全てを子どもたちのみで準備調理することが困難なため、各種団体の協力をいただくのですが、その過程で地域の皆さんに対する感謝の気持ちが育まれています。

また、岡谷市の特徴として岡谷市リーダーズクラブがあります。この団体は市内の中高生のボランティア組織で通学合宿の企画、運営を担い、参加する小中学生を楽しませたり、指導したりする過程でリーダーとしての資質の向上を図っており、小中学生はお兄さんお姉さんの姿に憧れ、中学生になると同時にリーダーズクラブに加入する子どももあり、人と人との繋がりが次の世代へ受け継がれています。



みんなで宿題

### ■ 実施にあたって

基本的なスタンスとして、なるべく子どもに運営が任せられています。安全面など大人が管理する部分はありますが、事業で起こる様々な課題や問題を、まずは子どもたちで解決するように促すことで、お互いのコミュニケーションが活発化し、通学合宿の目的である協調性や規範性などが培われるとともに、皆で協力して事業を終了した時の充実感、達成感が生まれ、日常生活の様々な面での意欲向上に繋がっています。

### ■ 長野県での通学合宿推進の取組

岡谷市の事例に留まらず、長野県では地域コミュニティ組織やNPO、PTA、学校等が連携して、公民館等で異年齢の子どもたちが共同生活しながら通学する合宿を進めていただけるよう、運営マニュアルや普及啓発用のパンフレットを作成していきます。地域の力を活用して、通学合宿を新たな長野県の特長としていきたいものです。

## コラム オリンピックメダリストの輩出をめざすSWANプロジェクト

長野県では、子どもたちに世界で活躍する競技者となる『夢とチャンス』を与えることを目的として、スキー、スケート、カーリング、ボブスレー、リュージュ、スケルトン競技を対象として、「SWANプロジェクト」(Superb Winter Athlete Nagano プロジェクト)を実施し、オリンピックのメダリストを目指した選手の発掘・育成を行なっています。

### ■ 趣旨と目標

2009年から始まったこのプロジェクトは、国のスポーツ基本計画及び長野県スポーツ推進計画に沿った競技力向上の視点に立ち、長野オリンピックの遺産である人的・物的・環境資源を最大限に活用しながら、オリンピックをめざす子どもたちに、様々なプログラムや練習環境を提供しています。

まずは、2018年韓国の平昌(ピョンチャン)で開催されるオリンピックでメダリストを輩出することを目標に活動しています。



### ■ 選考・育成について



冬季スポーツにおいて潜在的な能力を有する人材を発掘するため、メンバーを広く公募し、基礎体力をみる第1次選考、種目適性をみる第2次選考を行い、公益財団法人日本オリンピック委員会(JOC)、独立行政法人日本スポーツ振興センター国立スポーツ科学センター(JISS)との連携を図りながら世界に挑戦する競技者育成に必要なプログラムを提供しています。

フィジカルトレーニングはもちろん、メンタル面や、栄養面、国際社会に適応できる能力(語学やマナー等)など、世界で活躍するために必要なさまざまな面から、トップアスリートとしての資質を身に付けるプログラムを提供しています。

### ■ SWANメンバーの現状



現在(2013年3月現在)71名(1期生 16名、2期生 18名、3期生 21名、4期生 16名)の子どもたちが、オリンピックをめざして「育成プログラム」に取り組んでいます。

全国中学校体育大会等に数多くの選手が出場を果たしており、上位入賞するなどいくつかの大会で成果が現れてきています。SWANメンバーは、最長5年で卒業し、その後は、競技団体を中心とした育成によりオリンピックを目指すこととなります。平昌オリンピックの表彰台にSWAN出身者が立ち、日の丸を掲げる姿を楽しみにしていただきます。